
曇り空、晴れの道

曇坂陽向

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

曇り空、晴れの道

【Nコード】

N8472H

【作者名】

曇坂陽向

【あらすじ】

攘夷戦争が終わる瞬間、彼らは何を思っていたのか。現在バラバラになってしまった彼らの悲劇の過去。

(前書き)

かなりシリアスです。少しでも血表現出てきますので、ご注意ください。
長めですが、最後までお付き合い願います!;;;
本当に微妙にですが、「高杉誕生日小説」過去より届いた手紙」
にリンクさせてる：つもりです。

—もう、何をしても無駄だということも

—どう足掻いても何も変わらぬことも

すべて、分かっていた。

それでも、誰も何も言わなかったのは

あの激しい恨みが…決して消えることは
なかったから。

＊
＊
＊

「……。」

曇天の空だった。

その小さなボロ小屋は今の空色の如く薄暗く、ジメジメしている。
そこは、静寂に包まれていた。

「……っ」

微かに聞こえた、唸り声。

「どうした銀時」

「…いや」

「……血が止まらないのか…」

「俺の手拭いがまだ残ってる…使え」

「…………悪い」

銀時は高杉から手渡された手拭いをきつく足に巻き付ける。

「……やはり貴様ら2人は動けそうにないな…」

「……っ」

「……。」

桂の言葉に、2人は言い返せなかった。

正直に言って、本当に体はいうことをきかない。

高杉は左目が見えない上に腕を怪我しており、銀時は出血が酷いだ。

「行ってくる」

桂はそう言って、立ち上がった。

「!…行くって…」

「みなを置き去りにしてはおけん
キツと、上を向く。」

「…待て…俺も行ける」

高杉もゆっくりと立ち上がった。

「……。」

「無理をするな高杉」

「お前だって十分負傷してんじゃねーか…。…それに今はんな事言
ってる場合じゃねえんだよ。…俺の鬼兵隊がまだ戦ってる」

…違った。

『戦ってる』んじゃない。

正しくは取り残されている。

…でも高杉はあえてそうは言わなかった。

「…鬼兵隊も合わせて全部俺に任せろ。」

桂は高杉の体を氣遣った。

「…だが…」

「やめろ高杉」

高杉の反論を遮ったのは意外にも銀時であった。

「…銀時の言う通りにしておけ」

そう言い捨てて、桂が立ち去ろうとする。

「お前もだヅラ…！」

「!?!」

銀時の少し張り上がった声。

その声色とは裏腹に銀時はうつむいており、目に前髪がかかって見えない。

…見えるのは、その噛み締める口もとだけ。

「…なんだ…銀時…」

銀時の様子に桂は少々たじろいだ。

「……………」

銀時は俯いたまま、ギリ…、と齒軋りする。

「……。」

桂も高杉も銀時が話し出すのを待った。

「もう…お前らも分かってるはずだ…」

そしてゆっくりと、少しだけ顔を上げる。

「！」

銀時の目が、かろうじて見えた。

「今幕府と、それと組んだ天人軍が俺達を血なまこになって探してる…。

幹部の俺達を捕らえればもう抵抗勢力はほとんどなくなるんだからな…。」

銀時の目は、今まで見たことのないような、力のない悲しみを帯びた目をしていた。

もうその目に、輝きは見えなかった。

「……」

…そして更に続ける。

「俺達はみんなとはぐれた後偶々この小屋を見つけたが…もうみんなは…」

「黙れ！」

「……」

我慢の限界がきたらしい高杉が大きな声を出しても、銀時はピクリとも動かない。

「おめえが一番この世界を恨んでんじゃねえか!!ここまで来て何故諦める!?!」

…違う。

「そうだ!まだ俺は戦える!!」

…それも、違う。

「……。」

銀時はまた少し俯いた。

「…俺だって…」

「……」

「俺だってみんなが生きてるって信じてえよ」

「…っ」

「……」

—分かっていた。

「…幹部の俺達が…生き残って…みんなは死ぬのか…？
………そんな風になるくらいなら…こんな命はいらねえ…！」
高杉は力無く座り込む。

「…今までも…もうたくさん仲間が逝った…。
その仲間の為にも…最後まで戦うと決めたではないか！」

桂は声を張り上げるも、いつもの威勢の良さは微塵も感じられない。

「…何より…」

2人の声が重なる。

「松陽先生に顔向けできねえ」

「松陽先生に顔向けできん」

あれだけ斬って。

あれだけ殺して。

《剣は人を殺める為のものではありません》

そして、仲間が死に逝く。

《剣は、己が大切に思うものを護る為のものなのですよ》

ならばこの剣は、何の剣になるのだろう

天人を数え切れない程殺めたこの剣は

大切なものを護ることなど到底できなかったこの剣は

一体何であるというのか

「それでも……死んじゃいけねー」

「！」

「このまま死ねば地獄行きだろうぜ。

…今死んでもあの世で松陽先生には会えねーよ」

「……なら…どう生きればいい」

「……………」

>キイイイ!<

「「!?!」」

突然開いた扉。

「いたぞ!」

「……」

一瞬、思考が停止した。

入口には刀を持った2人の人間。
身なりからして、幕府の役人だ。

「貴様ら…攘夷軍の幹部か…!」

「その容姿……どうやら俺達は相当運が良いらしい…。まさか白夜
叉や狂乱の貴公子…鬼兵隊の長にまで会えるとは…」

「残念だが…貴様達の仲間はまだ生きて残っていない。諦める事
だ。」

「……っ」

「貴様達は今から幕府の方へ連行する。
廃刀令が先刻出された。刀は捨てろ。」

「――」

沸々と怒りがこみ上げ、それはやがて現実味を帯びてくる。
遂には怒りから恨みに変わる。
そして、訳のわからぬ程の悲しみ。

「……っ」

瞬間だった。

桂と高杉は同時に剣を抜く。

「「うおおおおお！！！！」」

―そして、剣を…振り下ろす。

――！！

「……あ……」

「……………」

2人の動きが、止まった。…いや、止められた。

「…銀…時………」

銀時の両腕が、桂と高杉の羽織りにのびている。

「……………もう………」

もう、

「殺さないでくれ」

その剣で

殺めるのはやめてくれ

「……………」

銀時の頬を液体がスーッと伝う。

「…っ」

すると桂は銀時の腕を振り解いた。

「…！」

一瞬。

桂は、刀の鞘で役人の腹を打撃した。
声を出す暇もなく、役人達は地面に崩れ去る。

「お前っ…」

高杉はものすごい形相で桂を睨みつける。

「何故斬らねえ！？……何で…！」

高杉は刀を今にも振り下ろす勢이었다。

「高杉っ…！」

それを銀時が制する。

「今更なんだってんだ！！俺たちやもうこれ以上汚れられねえくらい汚れきってるじゃねーか！！」

…いくら汚れても構わねえ…それでも松陽先生を奪ったこの世界をぶっ壊すって…そう決めただろうが！！」

「…もう無理だ！貴様廃刀令の意味くらい分かるだろう！？」
桂は先ほどとは一転、俯いている。

「そんなのに従ってたまるか！！」

「俺だって従わんわ！！だが俺達のように未だに攘夷を志している者はもう殆どいなくなった…！」

意味の無い殺生などなんの特にもならん！！」

「……」

「何で…何で…！！……っ！

………うゝあゝあああっ！！！！！！」

絶叫。

悲しみと恨みと悔やみが入り混じった叫びは、銀時と桂の身体に恐ろしく響く。

「…このままここにいてももうじき追っ手が来る。…行くぞ。」
さっきの叫びが無かったかのように、銀時は顔を上げ、いつも通りの表情を見せる。

「…ああ。」
桂もそれに従った。

しかし高杉は俯いたまま何も言わない。

「…………。」
銀時と桂は高杉の肩に手を置き、進むよう促した。

「…」
すると高杉はゆっくりと足を踏み出し、前進する。

そして3人は小屋を出た。

「敵の陣はこちらから西にある…東へ向かうしか、……………」

「……………」

「！」

(声！？)

桂は遠くから聞こえてくる、話し声のようなものに気がついた。

「?…どうしたゾラ…」

「銀時…話し声が聞こえないか!？」

「話し声…!?!?!?!」

話し声は近づいて来ているらしい。

少しして銀時も気がついたようだ。

「隠れろ！」

3人はボロボロの体を引きずりながら、小屋の裏に隠れる。

やがて話し声ははっきりと聞こえる所まで来た。

「この小屋も確認しなくては…」

「攘夷軍の幹部達は何人かの塊で一緒にいる確率が極めて高い。かなりの負傷はしているだろうが、それでも気を抜くなよ。」

「ああ。」

やはり、幕府の人間らしい。

人数は声からして5、6人だろうか。

「銀時…」

桂が小声で話しかける。

「ああ。…やべえな…。」

小屋の入口には、先ほどの幕府の役人が2人伸せている。

…バレる可能性が高い。

「扉を開けるぞ。」

取っ手に手をかける。

「ああ。」

扉が、開いた。

「…！こ…これは…」

2人の役人を見つけたのだろう。

「おい、大丈夫か！？」

「かなり強く打たれているな…」

「う…」

「！大丈夫か！？」

どうやら1人が目を覚ましてしまったらしい。

（もっと強く打っておけばよかったか…）

桂は激しく後悔した。

「やべえな…」

銀時の額からは、暑くもないのに汗が噴き出している。

「…バレたら…俺の合図で行くぞ。高杉、お前はここに残っている。」

「…クツ…馬鹿言ってるじゃねえ…。全員殺すさ…」

「……」

銀時にも桂にも、今の状況で高杉を注意する余裕は微塵もなかった。

「どうした！？誰にやられた！！？」

「う…ぐ……か…桂…だ」

「桂！？…桂とは…まさか…！」

「ああ…。桂小太郎…狂乱の貴公子…だ…。白夜叉…と…高杉も…いた…」

「何！？いつだ、いつやられた！？」

「ついさっき…どこかに隠れているやもしれん…」

「分かった！皆は小屋周辺の搜索に当たれ！俺は上に報告してくる！」

銀時、桂、高杉は刀を鞘から出し、臨戦態勢を取っていた。

「……」

（最早…仕方あるまい…）

桂は大きく息を吸う。

そして、

大きく地面を蹴った。

それを合図に、3つの影が跳ぶ。

「!?!?!…い…いた!?!? いたぞ!?!?」

「応戦しろ! どうせ戦う力など残つとらん!?!?」

役人達はすかさず刀を構えた。

「…っ！」

銀時は、着地と同時に1人をみね打ちにして、気絶させる。

「はぁっ！」

桂も1人、そしてまた1人。

「……」

「ぐあ、っ…」

「たっ…高杉…！」

高杉の着物が鮮血色に染まる。

「ククッ…ふあはははは！！全て…全てをぶっ壊してやる！！もう止まらねえ…！！！！獣の呻きが…！！！！止めらんねえ…！！！！」

高杉は狂ったように叫び、剣を振るう。

「高杉イイ！！」

叫ぶ桂の顔色は、蒼白だった。

高杉のあんな顔は幼なじみの桂でさえ一度も見たことは無かった。

…悲しくて、仕方がない。

「ヅラ…！！1人取り逃がした！！やべえぞ！！もうじき敵の援軍が来る…！！」

銀時の顔が引きつる。

「何…！？」

自らの血の気が一気に引いていくのが分かった。

「東だ！！東に逃げるぞ！！」

「分かった！」

「高杉！！お前も来い！」

「ッ…」

高杉は銀時と桂を睨みつけ、何も言わずに東へと続いている道の方へ、目にも止まらぬ速さで駆け出した。

「高杉イ！！お前怪我してんのに無茶すんじゃないねえ！」
その叫びも、彼にはもう届かなかった。

「…銀時…お前、走れるか…？」

「…ああ。…多分、な。」

銀時は苦笑する。

「じゃあ行くぞ…。」

銀時と桂も、高杉の後を追うように駆け出した。

「はあ…はあ…」

…ボロボロだった。立っているのさえ辛い。

「まだ：油断はできんな：」

3人が歩いている所は、まだ天人軍の領地内。
道の周りには、草がボウボウに生えている。何とも田舎らしい風景だ。

それっきり、誰も言葉を交わさなかった。
：というか、そんな気力すら無かった。

そして更に進んで行くと、
2本の分かれ道が見える。

「あれ：どっち行きゃぁいいんだよ」

「もう地図は無い。この際どちらでも構わんわ。」

「じゃ、適当に：」

「!…お…おい…」

桂が、突然声を上げた。

「ん？」

「足音のようなものが聞こえんか…？」

桂の顔がみるみる青ざめる。

「足音…？」

「聞こえるぜえ…俺には」

高杉が破壊的な笑みを浮かべる。

「なっ…まさか…」

銀時の顔色も更に悪くなっていく。

「!!!!!!!!!!」

目の前に現れた光景は…

…それは恐ろしいものだった。

「な…んで…」

俺達は敵陣営のある西の反対、東へ進んでいたはずなのに…

―目の前には…両方の道に広がる、幕府軍の軍勢。

「そうか…」

桂の唇が微かに動く。

「…？」

「俺達を東の端から搜索していた奴らだ…」

「……。」

理解した。それで全て説明が付く。

敵は2つに別れた道の両方にいる。
恐らく連絡を取り合っていたのだろう。

“攘夷軍の坂田・桂・高杉がこちらへ向かっている”と。

1つの道に、10数名ほど。

ただの搜索班らしく、そこまで人数は多くない。

しかし、立っているのさえ辛いような人間3人が太刀打ちできるとは思えなかった。

「お前ら…どうする?」

「高杉…?」

「俺は、殺す」

「！」

瞬間、高杉は左の道へ駆け出し、抜刀。

生きる、でも

死ぬ、でもなく。

殺る

といった高杉は

まるで獣そのもので…

血しぶきが上がり、

真っ赤に染まる―

「…っ」

しかし。…銀時と桂に何らかの感情を持てる余裕などあるはずも無かった。

襲いかかって来る敵。

2人は瞬間的に抜刀。

右の道へと駆ける。

左に行けば、右の敵に挟み撃ちにされる上に、狂ったともいえる高杉の巻き添えを喰らいかねない。

もう進むしかなかった。

後ろには更に大きな敵軍敵地。

退く事は出来ない。

不意に桂は左の道を見た。それはもう高杉を無意識に心配してのことで、本能的なものだったが。

(… “殺している。”)

“ 斬っている ” …ではない。
“ 殺している ”

もうそこに人間の面影は無かった。
全てを引き裂く、獣。

「あいつ怪我をしてるんだ！…あんなに激しく動いては…！」
桂は左の道へ行こうとする。
…しかし。

「ヅラ危ねえっ！！」

「！！」

敵に阻まれる。

そうもしている内に、遂には高杉の姿が見えなくなった。

「高杉っ…！！」

このボロボロの体で、今生きているのが奇跡と言って過言ではないだろう。

高杉を追う暇などもちろんない。
自分達が進むので精一杯だった。

「ぐっ…」

2人の体はもうとうに限界を超えていた。

「あと少し…！あと少しだ…！」

もう数はかなり減っていた。

とはいえ、少しでも気は抜けない。

とにかく、斬られてはならぬ。
それだけを考えて戦っていた。

「はあああッ!!」

ドサリ…、と鈍い音。

「…銀…時…」

「……。」

敵を全て倒したというのに、何なんだろう。

…この、喪失感は。

頬を伝うそれは

ポツリ

涙なんかじゃなく

ポツリ

涙より悲しい、

哀れみの雨

「……」

「銀時」

ポツリ

気が付けば、敵の領地を出ていた。
天領（幕府の領地）からもかなり離れた。

ザ
ア
ア
ア
：

雨が、血を洗い流す。

敵のものなのか、自分のものなのかさえわからない血

「この気持ちも」

この血のように

「流れてしまえばいいものを」

「ツラ」

「ツラじゃない桂だ」

「…ここで、お別れだ」

ザ
ア
ア
ア

ザ
ア
ア
ア
ア
ア

「……」

桂は少し目を見開いた。

「俺ア俺の好きなように生きる」

もう、殺さない

「お前は…」

「…俺も、俺の生きたいように生きる」

まだ…やるべきことがある

お互いに分かった。

銀時がもう戦わないと決したことも

桂がここまでボロボロになろうとも攘夷活動を続けようと思っ
ていることも。

…もう同じ道を

歩く事は出来まいのだと――

「俺は…あっちに行く」

「なら俺はこっちか」

この道は

別れ道――

彼らはお互いに背を向ける。

ザアアアア

雨が止む気配は無い

「……っ」

銀時と桂はその暗い空を仰ぐ。

「お前泣いてんの」

ガラにもねえ

「分らん」

自分の気持ちも分らんのに

「雨か涙か」

そんなの
そんなの

「分かるわけない」
「分かるわけねえ」

「おめえ、死ぬんじゃないぞ」

「貴様もな」

また、次に会うときは

笑って会わんか

良いぜ

破ったらてめー俺にパフエ奢れよ。

ー約束だー

「…い…おい…銀時！」

頭にガンガン響く男の声。

「う…」

「起きたか…」

「あー？ あんだよヅラァ…つーかてめえどっから湧いて来やがったんだよ…」

銀時は頭をポリポリかきながら言った。

「ふっ…。真選組の追跡から逃れて、ここに行き着いたのだ。」

『ここ』…つまり、万事屋銀ちゃんだ。

「行き着いただぁ！？ てめーただ単にここに逃げ込んだだけだろうが！！ その上俺を起こすたぁどういう了見だアホ！！」

銀時は寝ていたソファから身を乗り出す。

「アホじゃない桂だ！！ 貴様が苦しうに眠っていたから起こしてやったものを！ 何んだその言い草は！！」

桂は腕を組んで銀時を睨み付けた。

「…はぁ？ 苦しそうに？」

「貴様でも苦しい夢なんてみるんだな。…まあ俺が知る中では2回目だが。」

桂は小さく笑った。

「…なあヅラ。」

急に銀時の表情が真剣味を帯びてくる。

「ヅラじゃない桂だ。…何だ銀時」

「お前さあ、覚えてるか」

「…？」

「俺達がバラバラになった、あの日だ。」

「……」

桂は少し驚いたような表情を浮かべる。

「…忘れられる方がおかしいだろう」
ポツリ、と呟いた。

「まあな」

「……………夢に見たのか」

「夢はてめーで決めて見られるもんじゃねえからな」

「……今思うと…酷い思い出…。」

「よくあんな年頃に天人相手にドンパチやってたもんだぜ。」
2人は遠い目をしながら微笑んだ。

「やつは」

「？」

「奴はいまどうしているかな」

「……。」

「元気になっているんだろうか」

「…ぶっ」

「……何故笑う」

「だって」

「次会ったら斬る宣言してた奴があいつの健康心配してんだもん」

「……」

「まあ、あんなはぐれ方したんだ…。しょうがねえよ。」

銀時が悲しそうに笑う。

「……そうだな。」

桂もほんの少しだけ笑って、頷いた。

「でもさ、今になって思うんだが…何で俺達はある所で別れたのかねえ…。俺から言っただけに全く覚えてねえや。」

銀時は天井を見上げた。

「……俺達はある所にいた時点でもうこれからやろうとしていることが違った。一緒に歩くことはもう出来まいと思ったのだろう。」

「…そう、か…。」

「それに…」

「？」

「高杉と一緒にいてやる事が出来ない以上、俺達だけが一緒にいる事など出来なかったんだろう…。」

「……。」

「そう…だな…」

今日の空は、一段と明るく輝いていた。

あの日の空の色とは正反対の、美しく澄んだ空。
そんな空を2人で窓から見上げる。

この、どこまでも続く空を、青く光る空を――

「銀時、高杉、今日は一段と空が綺麗だぞ。」

「ああ。」

「雨続きだったのが明けたみてえだな。」

「この戦いが終わったら：小さいころよく松陽先生と行った萩の町の土手でメシ食おうぜ。」

「ははっ。そういえばよくこんな天気の良い日に行ったな。」

「いいじゃねえか。また行こうぜ。」

「よっしゃ！決まりだな。」

運命を憎んで

神様を恨んで――

それでも俺達は生きている

「ヅラ、久しぶりにメシ食いに行かね？」

「…そうだな。」

…たがう道に、各の幸あらんことを――

e
n
d.

(後書き)

最後までお付き合いいただき、本当にありがとうございます！
感想などいただけるとすごく嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8472h/>

曇り空、晴れの道

2010年10月10日21時51分発行